The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	CLD児の枠組みから考えるコーダのバイリンガリズム、バイカルチュラリズム、アイデンティティ
Author(s)	安東, 明珠花
Citation	母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）研究. 2021, 17, p. 109-122
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88289
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

≪研究ノート≫

CLD児の枠組みから考えるコーダのバイリンガリズム、バイカルチュラリズム、アイデンティティ

安東 明珠花（東京大学大学院総合文化研究科　博士課程）
asukay525@gmail.com

Coda's Bilingualism, Biculturalism and Identity in the Framework of Culturally and Linguistically Diverse Children

ANDO Asuka

要　旨

「コーダ（Coda: Children of Deaf Adult/s）」とは、聞こえない親を持つ聞こえる子どもを意味する呼称である。聞こえない親との生活を通して、手話とろう文化に触れることから、手話と音声言語のバイリンガル、ろう文化と聴文化のバイカルチュラルに育つコーダもいる。移民の子どもや国際児と同様な背景を持つコーダがいるにもかかわらず、現在まで CLD 児の枠組みでコーダについて言及されることは少なかった。本論文では、２名の成人コーダへのインタビューから、「コーダ」という言葉に思春期までに出会い他のコーダやろう者と交流を持つことが、コーダの肯定的なアイデンティティ形成に重要であると仮説を立てた。今後、手話と音声言語の二言語、ろう文化と聴文化の二文化の環境で過ごすコーダについての研究が発展することで、国籍や滞在国だけでは判断できない CLD 児の存在にも目を向けることに繋がると期待する。

Abstract

"Coda" is the term used to describe hearing Children of Deaf Adult/s. Some Coda become bilingual of sign and spoken language, and bicultural of Deaf and hearing cultures. Although these Coda have similar background to children of immigrants or international children (*kokusaiji*), Coda have been invisible in the discussions of Culturally and Linguistically Diverse (CLD) children. In this paper, one hypothesis was

built from interview data of two Coda adult participants: acknowledging the term “Coda” by the age of adolescence and meeting other Coda and Deaf adults/children are important to affirmatively develop identity of Coda. Further research on Coda who are bilingual and bicultural will lead to studies on other invisible CLD children who cannot be judged by their nationalities and living countries.

キーワード：コーダ、バイリンガリズム、バイカルチュラリズム、手話、音声言語

１．はじめに

コーダ（Coda: Children of Deaf Adult/s）とは聞こえない親を持つ聞こえる子どもの呼称である。聞こえない親から聞こえない子どもが生まれる確率は５～10％（Singleton & Tittle, 2000）と言われていることから、聞こえない親から、約 90％以上の確率で聞こえる子ども（＝コーダ）が生まれると考えられている（Filer & Filer, 2000）。つまり、聞こえない親から生まれてくる子どもは高い確率でコーダであると言える。

コーダは生まれた時から聞こえない親と手話でコミュニケーションをとったり、聞こえない親の文化に触れたりするなど、手話と音声言語のバイモダル・バイリンガル、ろう文化と聴文化のバイカルチュラルだと考えられてきた（Czubek & Greenwald, 2005; Knight, 2013）。そのような背景を持つコーダは、聞こえない親の手話とろう文化を継承する存在として､移民の子どもや国際児と比較されてきた（澁谷 , 2007；中島 , 2019）。また、手話と日本語のバイリンガル・ろう文化と聴文化のバイカルチュラル（つまり、言語的文化的に多様な背景を持つ子ども）という側面では、ろう児とも類似している。本論文では、まず、1995 年頃から日本でも使われるようになった「コーダ」という言葉について説明する。次に、コーダの CLD 児としての側面について整理し、CLD 児とコーダを比較する。そして、コーダのアイデンティティ形成について成人コーダ２名へのインタビューの一部をまとめ、考察する。最後に、CLD 児の枠組みでコーダについての研究を行う意義と今後の課題について言及する。

2．コーダとは

コーダとは、聞こえない親を持つ聞こえる子どものことを意味する語である。アメリカのコーダ団体「CODA International」[1] の定義に基づいて、日本でも「聞こえない親を持つ聞こえる子ども」が一般的な定義になっているため、「両親」ではなくどちらかの親が聞こえない聞こえる子どももコーダとして定義される。一方で、生育環境や両親の聞こえの程度によって、コーダのカテゴリー分けがされている現状もある（中島 , 2019）。生まれた時からずっと手話環境でって幼少期から手話のできることがコーダの「正統」な姿として認識されていることから、そうでないコーダは「中途」としてコーダの多様性の中に位置付けられる。また、コーダには「両親がろう」であるというイメージがあるため、片方の親は聞こえるがもう片方の親が聞こえない場合は「半コーダ」と呼ばれることがある（中島 , 2019）。

コーダは「heterogeneous group（様々な種類の人々が集まった集合体）（Hofmann & Chilla, 2015）」と言われていることからも、アメリカなどの英語圏ではコーダの表記が細分化されている。コーダと聞こえない親のコミュニケーション方法は手話に限らず様々な方法が用いられており、両親以外の聞こえない人との関わり方や家族構成、言語使用、アイデンティティ形成などコーダの背景は多様である。Bishop and Hicks（2008）を元に、コーダの英語表記を表 1 に示す。

表1　コーダの表記とその定義（Bishop & Hicks, 2008を参考に作成）

表記	定義
coda	「聞こえない親を持つ聞こえる子ども」だが、自身を文化的にろう者であると認識していないコーダ。
Coda	自分が文化的にろう者であると認識しており、ろうコミュニティの中で育ったコーダ。コーダとしてのアイデンティティを持っているコーダ。ろう文化に馴染み、手話に堪能であるコーダと定義する人もいる。
CODA	コーダの団体。Children of Deaf Adult(s) の略称。
Koda	Kids of Deaf Adult/s の略称で、18 歳以下のコーダを意味する。
HMFD/MFD	HMFD=Hearing Mother Father Deaf の略称で、英国ではよく使われる略称である。両親ともにろう者であることを強調する時に対比的に使われる語句として使用されることが多い。MFD=Mother Father Deaf で、HMFD と同様の意味である。

上記の表から、コーダの表記は細分化されていることと、全てのコーダがコーダ

としてのアイデンティティを形成していくとは限らないということが分かる。それには様々な要因が考えられるが、親子間のコミュニケーション方法がそのひとつとして挙げられる。聞こえない親とのコミュニケーションとして手話を使用するコーダもいれば、口話法や指文字を駆使しながらコミュニケーションをとるコーダもいる。このように、コーダが持つ背景は多様であり、全てのコーダが CLD 児に当てはまるとは言い切れないという点についても言及しておきたい。

3．コーダのバイリンガリズムとバイカルチュラリズム

コーダは手話と音声言語のバイモダル・バイリンガル、ろう文化と聴文化のバイカルチュラルと考えられてきた（Czubek & Greenwald, 2005; Knight, 2013）。日本においてコーダがバイリンガル・バイカルチュラルとして考えられるようになったのは、ろう文化宣言[2)] が発表された 1995 年代以降であると考えられている（中島 , 2019）。1995 年にコーダという言葉が「ろう文化宣言」や「ろう文化」と一緒に紹介されたことがきっかけで「コーダはろうの親から手話とろう文化を継承したバイリンガル・バイカルチュラルな集団である」というイメージが広がったと中島（2019）は推測した。次節でコーダのバイカルチュラリズムとバイリンガリズムについて具体的に説明する。

3.1 コーダのバイカルチュラリズム

聞こえない親との生活を通して、コーダは聞こえない親の生活様式（ろう文化）を継承することがある。例えば「聴者の視線は物足りない」と感じてしまうコーダが多いのは、コーダは親とのコミュニケーションによって話す相手を「じっと見つめる」ことを身につけているからだ（澁谷 , 2009）。他にも、コーダには物事をはっきり言う、行き先を細かく説明するなどのろう文化が内面化されているケースが多く見られる（澁谷 , 2009）。ろう者は曖昧な表現を避ける傾向にあるため、目に見えることははっきり伝えるし、それについて悪気はない。また、行き先を伝えることは、視覚重視のろう文化ではマナーとして捉えられているため、トイレに行く時、お風呂に入る時、ろう者はそれを周りに伝える。聴者の場合は、耳から入る情報で家のどこに誰がいるか把握できるため、部屋を移動する際にわざわざ周りに伝える必要はないが、聞こえない親との生活を通してコーダの多くは、ろう文化を継承している。

3.2 コーダのバイリンガリズム

コーダは手話と音声言語のバイモダル・バイリンガルと捉えられてきた一方で、コーダには手話と音声言語の均衡バイリンガル（balanced bilingual）は少なく、二言語の比重としては手話に比べて音声言語が優勢である場合が多いということも現在までに明らかになっている。中島（2019）が国内のコーダ 25 名のバイリンガル状況を調査した結果、「手話と日本語のバイリンガル」というイメージがあるコーダでも、日本語使用の方が多いということが明らかになった。アメリカのバイリンガリズム研究においても、多くのコーダにとっては手話よりも音声英語の方が“dominant language”（優勢言語）であると証明されている（Emmorey, Petrich & Gollan, 2013）。音声日本語が優勢言語であることが影響しているかどうかは明らかになっていないが、自分の手話を「不完全」だと認識しているコーダがいることも分かっている。

また、全てのコーダが親子間コミュニケーションとして手話を使用するわけではない。つまり、コーダだからといって必ずしも手話と音声言語のバイリンガルになるわけではない。中井・丸田（2019）は、コーダが親子間のコミュニケーションにおいて手話を使用せずに口話法や指文字を使用した背景として、日本社会の音声日本語の優位性があると指摘した。他にも、聞こえない親がろう学校で受けた厳しい口話法教育の影響のため、親がコーダに手話を使用しなかったという例もある。コーダの親子間のコミュニケーションだけではなく、聞こえない親が手話を使用しなかった背景にも、日本社会にある「音声日本語の優位性」が影響を及ぼしていると考えることができる。

コーダの中には親と深いコミュニケーションをとりたいという思いから、大人になった後、手話を学ぶ者も多くいる（澁谷 , 2007）。しかし、「コーダは手話ができる」という先入観を向けられることから、コーダであることを隠して手話を学ぶ者が多い。また、地元の手話サークルに行くと、「〇〇さんのお子さんね！」と名字から両親が聞こえないことが知られたり、ろう文化を継承しているコーダは仕草などでコーダであることが他の手話学習者に知られてしまったりして、コーダであることを隠しながら手話を学ぶことができず、手話学習から遠ざかるコーダもいる。

このような現状から、コーダの会において、コーダが講師となりコーダのみを対象とした手話勉強会を実施している例もある。コーダには多様な背景があるにもかかわらず、当然手話に堪能であるという先入観を向けられることが、コーダを手話学習の機会から遠ざけている。

3.3 コーダのアイデンティティ

多くのコーダは、「聞こえる世界」と「聞こえない世界」の間での葛藤を経験してきていることから、「コーダ」のアイデンティティは、「聴」でも「ろう」でもない”third niche”（第３のニッチェ）だと考えられている（Bishop & Hicks, 2005）。日本において、コーダのアイデンティティ形成について考察した研究は、筆者の修士論文（山本 , 2017）のみで、コーダのアイデンティティ形成に関する研究は希少である。山本（2017）では、成人５名のコーダにインタビュー調査を実施し、コーダのアイデンティティ形成には、「両親の聞こえの程度」、「親子間コミュニケーションの方法」、「コーダコミュニティとの関わり」が影響していると考察された。「両親ともろう者」で、「親子間コミュニケーションとして手話を使用」し、「他のコーダとも定期的に関わる」コーダはコーダとしてのアイデンティティを強く持つ一方で、「片親のみが聞こえない」、「手話や口話など様々な方法を用いてコミュニケーションをとる」、「他のコーダとあまり関わったことがない」コーダはコーダとしての自分に自信を持てずにいた。これは、中島（2019）で述べられたように、コーダは両親ともにろう者で手話ができるというイメージがあることに起因していると考えることができる。

４．CLD 児とコーダの比較

これまでコーダのバイリンガル・バイカルチュラルの側面について先行研究を中心に紹介した。次に、コーダと今まで CLD 児の枠組みで語られてきたこととを比較する。

まず、CLD 児の定義に含まれている「文化的・言語的に多様である点」というのは、コーダも CLD 児も同様である。しかし、コーダの場合、民族・国単位での文化や言語ではない点や、日本社会において言語的・文化的側面よりも「障害者の親を持つ子ども」という側面が強調されやすい点が、コーダの多文化・多言語性に視点が向けられにくい要因となっている。1995 年以降にコーダが「バイリンガル・バイカルチュラル」な存在として見られるようになったと中島（2019）は推測したが、25 年経った現在でも、その社会的認知は低い。

次に、日本で暮らすコーダは多数派言語である日本語で教育を受けるという点が、日本で暮らす移民の子どもの状況（特に公立学校に通うしか選択肢がない子ども達）と類似している。例えば、学校教育開始後の日本語習得の苦労や、親より日

本語力が優ってしまう、親の通訳を担うなど、類似する点はいくつかある。しかし、CLD 児の中には、親の言語や文化を継承してほしいという願いからインターナショナルスクールや朝鮮学校、ブラジル学校に通わせる選択肢がある一方で、コーダにはろう学校に通うという選択肢は皆無である。これは、ろう学校に通うか聴児の学校に通うかという選択肢を持つろう児とも異なる点である。

最後に、聞こえない親とコーダ双方に手話を継承しようという意思がそれほど強くないことが他の CLD 児とは異なる点であると考えられる。聞こえない親は、コミュニケーションが伝わるかどうかという点に重きをおいていることから、自分たちが使う手話言語の継承についてそれほどこだわらなかった（澁谷 , 2007）。そのような親の意識が関係しているかは明らかではないが、コーダ自身にも手話を継承するという意識が低いとも言われている（中島 , 2019）。また、コーダだから手話ができるという先入観を持たれることが壁となって各地域にある手話サークルに通うことを躊躇することもあり、コーダが家庭以外で手話を使用したり学んだりする場はほとんどない。特に児童期はそれが顕著なため、音声日本語が優勢にならざるをえない状況がある。この点も、他の CLD 児とは異なる。

このように、コーダと CLD 児は共に「文化的・言語的に多様」という背景と、親より日本語が優ってしまうという点は類似しているが、コーダの場合「障害者の子ども」という視点の方が強い傾向にある点、学校教育の選択肢の中にろう学校がない点、言語継承の意識が低い傾向にある点、また手話を使用したり学習したりする機会が家庭内に限定されている点などの相違点もある。

5．研究概要

先行研究から、コーダと CLD 児の言語使用や文化継承には相違点のあることが分かった。聞こえない親を持つコーダは、CLD 児に比べ、バイリンガル・バイカルチュラルな存在に見られにくく、「コーダ」という言葉に出会うまで自分たちがそのような存在であると認識していないコーダも多くいると予測される。コーダが CLD 児と大きく異なる点として「障害者の子ども」という視点があるが、コーダという言葉に出会うことで、文化的視点に出会い、コーダとしてのアイデンティティを形成していくことができると推測できる。

現在、筆者は博士論文のために数名の成人コーダにライフストーリーインタビュー調査を実施している。本研究ノートでは、現在進行中のインタビューから、

２名の成人コーダについて考察する。一人は小学生の頃から「コーダ」という言葉を知っていた 20 代コーダ（男性）、もう一人はインタビュー実施の数ヶ月前に「コーダ」という言葉に出会った 30 代コーダ（女性）である。「コーダ」という言葉との出会いがコーダとしてのアイデンティティ形成に貢献することができるという仮説に至った理由について、インタビュー内容を抜粋して紹介する。また、筆者自身もコーダであり、コーダ同士の対話における語りであるという点も言及しておきたい。

5.1 インタビュー協力者

本研究ノートでは、２名の成人コーダの第１回目のインタビューの一部についてまとめる。一人はタカシ（仮名・20 代・男性）、もう一人はマリ（仮名・30 代・女性）である。インタビューは 2020 年 10 月にそれぞれオンラインで実施した。２名とも筆者とはインタビューが初対面である。タカシは、父がろう者、母が中途失聴で、コーダの姉がいる。手話をあまり使わない時期もあったが、現在の親子間コミュニケーション方法は手話である。小学生の頃には「コーダ」という言葉を認識しており、教会で同世代のコーダに会っていた。マリは、両親ともにろう者で、コーダの妹がいる。親子間のコミュニケーションは主に口話（相手の口を読み取る）である。両親同士（つまりろう者同士）の会話は手話で行うが、親子間コミュニケーション（ろう者と聴者）の会話が口話で行われるというケースは珍しくない。先行研究にもあったように、音声言語が優位なコーダは多い。

5.2「コーダ」という言葉との出会い（タカシ）

タカシは物心のついた頃から、コーダという言葉を認識していた。 また、教会でろう者のコミュニティやそこに集まるコーダと交友を深めていた。

発話データ１（A: 筆者、T: タカシ）

A: コーダっていう言葉を知ったきっかけとかタイミングとかあれば教えてください。

T: 両親が教会に通っているっていうのがあって、そこに付いて行ってたんですけと、そこに集まっていた人たちがみんな両親がろう者、子どもがコーダだったり、まあデフファミリーだったり、わりと多く、いつっていうのが、結構自然にコーダっていう言葉を知ったので、多分物心ついた頃、まあ小学生からだと思います。

A：教会で他のコーダと会ったりしていたってことですか。

T：教会に同じ世代のコーダがいっぱいいるので、もう幼馴染みみたいです。…日曜日にみんなで集まって、まあ子どもなんでそんなに、（コーダと会うというよりかは）どちらかというと友達と会えるみたいな感覚で。

以前は手話に苦手意識を持っていたタカシだが、高校卒業からろう者が多く働く会社に就職し、そこで働いているろう者の紹介でコーダとの出会いもあった。現在はろう者と日常的にコミュニケーションをとる環境で生活している。また、ろう者が多く在籍する社会人サッカーチームにも参加し、ろう者の友人も多くいる。タカシが手話をきちんと習い始めようと思ったきっかけは、そのサッカーチームにいるろう者の一人に「コーダなのになんで手話ができないの」と言われてハッとした経験である。

幼少期からコーダという言葉を知っていたが、それが手話の日常的な使用に直接的に結びつくわけではないということが分かる。しかし、「コーダなのに手話ができない」というろう者の発言から、手話への学習意欲を抱き、今は手話でコミュニケーションをとることを楽しんでいる。また、他の手話学習者と比べて読み取りが得意であるのは「もともとろう者の世界にいたから」だと振り返った。

発話データ２（A: 筆者、T: タカシ）

A：サッカーチームに入ってから手話を使う機会が増えた。

T：サッカーチームに入って、ある同じチームの人からなんで手話できないのって言われて、そこでコーダなのになんでできないのって言われて、なんかハッてなりました。

A：なんでできないって言われてハッとなったのはショックか、「あ、やべえ」なのかどういう。

T：そうですね。ショックというか、そうですね。ショックもありますし。結構読み取りの方はできたんですけど。もともとろうあ者の世界の中にいたからですかね。ただ、自分がこう伝えることができなかった。なんかそれでそういうふうに言われて。なんで手話はできないのって。話は分かるけどこっちからこうしゃべれないっていうので。もっと自分からしゃべれるようになりたいっていうのでそれがきっかけですね。

5.3「コーダ」という言葉との出会い（マリ）

マリがコーダという言葉に出会ったのはインタビューの約３ヶ月前だった。SNSである人のつぶやきを見て、コーダという言葉を知った。

発話データ３（A: 筆者、M: マリ）

A：（コーダという言葉を）知った時どんな気持ちでした？

M：え、いつからそんな言葉あったのって感じでしたね。

A：…私はコーダって言葉を知った時にすぐ姉と妹に「え、私たちコーダって言うらしいけど知ってた？」って言ったら、「え、何それー」って。（私は）大学の先生から聞いたんですけど。なんかすごい新鮮で。（マリさんは）まだ知りたてほやほやで。

M：もっと早く知りたかったです。

A：なんでもっと早く知りたかったと思ったんですか。

M：やっぱりなんだろ、少数派というかあんまりいないから。なんかコーダっていうの知っていれば、自分でいろいろ調べて集まりとか行けたんじゃないかなって。

コーダという言葉は1995年代から徐々に日本で使われるようになっていたが、コーダ自身もその言葉を知らないというケースは少なくはない。2020年には、コーダが自分の人生を振り返った本が３冊ほど出版されたが、「コーダ」という言葉を認識していないコーダには、その本は届きにくい。コーダという言葉を「もっと早く知りたかった」と話したマリは、コーダとしての自分の人生を振り返った時「辛かった」、「あの頃には戻りたくなかった」と話した。

発話データ４（A: 筆者、M: マリ）

A：最近、コーダっていう言葉を知って、なんかコーダとしての自分をこう、振り返ったりしましたか。

M：そうですね。昔のことを振り返ることを子どもたちが寝てから夜ちょっと思い出したりとかしてました。

A：そういう時、どういうことが、こう。

M：やっぱり、辛かったなぐらいしかないですね。

A：一言でまとめると。

M：良いこともあったけど、やっぱりあの頃には戻りたくないなというのはありますね。

A：どのくらいの時が一番しんどかったですか。

M：でもなんか小学生から高校２年まで辛かったです。

小学生から高校生まで辛かったというマリは、もしその頃「コーダ」という言葉を知っていれば、その辛さを軽減することができたのだろうか。コーダという言葉を知った現在、マリは自分の人生をどのように振り返り、歩んでいくのだろうか。

5.4 考察

タカシは幼少期からコーダという言葉を認識しており、自分以外にも同じような境遇の人たちがいるということも理解していた。インタビューの中でも「ろう者の世界にいたから（手話の）読み取りが得意」などと話しており、コーダとしての自分を肯定的に捉えていることが推察できる。一方、マリはコーダという言葉に「もっと早く出会いたかった」と述べていた。このような発言からも、コーダが安定したアイデンティティを形成するためには遅くとも思春期までに「コーダ」という言葉に出会うことが重要であると仮定することができる。コーダという言葉との出会いで「自分以外のコーダという存在」も認識し、「自分だけではない」と救われるコーダもいる（五十嵐 , 2021; 澁谷 , 2009）とあるように、「コーダ」という言葉に出会ってから、コーダとしての自分と向き合えるのだ。また、自分の文化的・言語的に多様な側面を肯定し共感してくれるコーダとの出会いも、安定したアイデンティティの形成に影響するのではないか。「コーダ」という言葉と出会う時期とアイデンティティ形成の過程の関係性について、今後さらにインタビューを重ねることで分析を進めたい。

また、成人後にコーダという言葉に出会い「もっと早く知りたかった」と振り返るコーダは、その後どのように変化していくのか。マリは、インタビュー時がコーダのことについて話す初めての機会だった。コーダという言葉に出会い、マリの中にどのような変化が生まれたのか、またコーダ同士での対話を重ねることで今後どのように変化していくのかなど、長期的にインタビューを実施し、彼女の変化の過程を分析・考察したい。

CLD 児の安定したアイデンティティ形成のためには、親子の関わり方が重要であるということが分かっている。例えば、CLD 児は親の言語で育てることで安定し

たアイデンティティを得られやすいこと（真嶋ほか , 2014）、親が子どものロールモデルとなって関わっていくことの重要性（甲田 , 2016）などが先行研究でも述べられている。コーダと聞こえない親の関わり方がコーダのアイデンティティ形成にどのように影響しているのか、という点を考察するためには、コーダだけではなく、聞こえない親を対象とした研究も必要だろう。コーダと CLD 児のアイデンティティ形成の比較のためにも、児童期のコーダとその親への調査も将来的には行いたい。

6．最後に

CLD 児の枠組みの中でコーダを研究していくことで、今まで多く研究がされてきたバイリンガルのグループと、コーダのように国籍や滞在国では判断できないバイリンガルのグループとの比較をすることができる。またそのような比較を通し、バイリンガリズム・バイカルチュラリズム研究の発展に寄与することができると考える。コーダのバイリンガリズムは様々な要因が絡んでいることから、量的手法ではなく、質的手法がより適切ではないかと思われる。現在筆者はコーダのバイリンガリズムの実態とその過程を、ライフストーリーインタビューによって追究しつつある。コーダの安定したアイデンティティ形成や良好な親子関係の構築のためにも、コーダの言語使用やアイデンティティ形成に関する研究は重要であると考える。

また、今後の方向性として、インタビュー調査のほかに、年代ごとにコーダが手話を使用する場の変容を量的手法で調査し、幼少期〜児童期までのコーダは家庭以外でも手話を使用する場があるのか、あるとすればどのような場所か、などコーダの手話使用の現状の把握も重要である。音声言語優勢とされているコーダのバイリンガリズムの手話使用の現状について調査することで、コーダの言語・文化継承の実態が明らかになるだろう。

本論文では、コーダのバイリンガル･バイカルチュラルな側面について言及した。ろう児と同様、手話と音声言語、ろう文化と聴文化の中で生活するコーダは、CLD 児の枠組みの中で議論するに値する存在である。その一方で、コーダ特有の背景から、家庭で手話を継承したり学んだりする場が他の CLD 児と比較して圧倒的に少ないことも相違点として挙げられる。この点は、日本の中で社会的立場が低い言語を使用する CLD 児とも類似していると考える。日本で生活し日本人の親に育てられながらも手話と日本語の二言語、ろう文化と聴文化の二文化の環境で過ごすコーダというグループも CLD 児の枠組みで議論することで、国籍や滞在国だけでは判

断できないCLD児の存在にも目を向けるきっかけとなることを期待する。

注

1）CODA Internationalのウェブサイト：https://www.coda-international.org
2）ろう文化宣言において「ろう者は日本手話を使う言語的少数者である」と木村・市田（1995）は論じた。

引用文献

五十嵐大（2021）「コーダを生きる２−コーダというラベルがもたらす安堵感−」『scripta（スクリプタ）』15 (2), 36-41.
木村晴美・市田泰弘（1995）「ろう文化宣言―言語的少数者としてのろう者 (聾文化宣言)」『現代思想』23(3), 354-362.
甲田菜津美（2016）「CLD児の学習意欲に関する一研究―家庭でのインタビュー調査から」『日本語・日本文化研究』26, 168-179.
澁谷智子（2007）「聞こえない親をもつ聞こえる人々の手話学習―フィールドワークにおけるコーダの語りから」『社会言語学』(7), 43-55.
澁谷智子（2009）『コーダの世界―手話の文化と声の文化』医学書院
中井好男・丸田健太郎 (2019)「音声日本語社会が生み出すダブルバインドに関する試論 ―見えないマイノリティによるコラボラティブ・オートエスノグラフィーを通して」『日本語教育学会秋季大会口頭発表予稿集』
中島武史（2019）「コーダイメージと言語意識―移民の子どもとの類似・相違」『社会言語学』19, 85-99.
真嶋潤子 , 櫻井千穂 , 孫成志 , & 于涛（2014）「公立小学校における低学年CLD児への言語教育と二言語能力：中国語母語話者児童への縦断研究より」『日本語・日本文化研究』24,1-23.
山本明珠花（2017）『聞こえない親を持つ聞こえる子どものアイデンティティ：日本人コーダの手話使用と自己意識』. 東京大学総合文化研究科言語情報科学専攻修士論文（未公刊）
Bishop, M., & Hicks, S. (2005). Orange eyes: Bimodal bilingualism in hearing adults from deaf families. *Sign Language Studies*, *5*(2), 188-230.
Bishop, M., & Hicks, S. L. (2008). *Hearing, mother father deaf: Hearing people in deaf families*. Gallaudet University Press.
Czubek, T. A., & Greenwald, J. (2005). Understanding Harry Potter: Parallels to the deaf world. *Journal of Deaf Studies and Deaf Education*, *10*(4), 442-450. https://doi.org/10.1093/deafed/eni041
Emmorey, K., Petrich, J. A.F., & Gollan, T. H. (2013). Bimodal bilingualism and the frequency-lag hypothesis. *Journal of Deaf Studies and Deaf Education*, *18*(1), 1-11. https://doi.org/10.1093/deafed/ens034
Filer, R. D., & Filer, P. A. (2000). Practical considerations for counselors working with hearing children of deaf parents. *Journal of Counseling & Development*, *78*(1), 38-43. https://doi.org/10.1002/j.1556-6676.2000.tb02558.x
Hofmann, K., & Chilla, S. (2015). Bimodal bilingual language development of hearing children of deaf parents. *European Journal of Special Needs Education*, *30*(1), 30-46. https://doi.org/10.1080/08856257.2014.943563

Knight, T. R. (2013). *Social identity in hearing youth who have deaf parents: A qualitative study*. (Publication No. 3606450) [Doctoral dissertation, Lamar University]. ProQuest Dissertations Publishing.

Singleton, J. L., & Tittle, M. D. (2000). Deaf parents and their hearing children. *Journal of Deaf Studies and Deaf Education*, *5*(3), 221-236. https://doi.org/10.1093/deafed/5.3.221